



大原アトラス 5 色素性の母斑

■大原國章・著

評者 田村敦志
伊勢崎市民病院皮膚科

まず、驚いたのは「色素性の母斑」だけでこの分厚さかという、アトラスとしての本書の容量である。臨床アトラスという性格からしてこれだけの分量になるということは、本質的には同じような写真が何枚も並んでいるであろうことを想像した。しかし、目次を見るとさまざまな角度からそれぞれの母斑が分類されており、まれな臨床型・病態から自然経過、多様な治療後の経過まで、母斑診療に欠かせない要素を系統的に集積した内容であることがわかる。さらに中身を見ればどの写真もそれが数多くの経験症例のなかから意図をもって選別されたものであることが理解できる。多様な臨床および病理組織写真に加え、適宜、ダーモスコピー所見やメラノーマとの鑑別点なども盛り込まれていて、母斑のことなら何でもわかるアトラスとなっている。

医師という職業は一人前になるまでに好むと好まざるとにかかわらず、多くの医療機関を渡り歩く場合がほとんどである。このような人材派遣を兼ねた教育システムは多くの指導者に巡り会い、多くの領域を経験できる点で優れているが、一人の患者さんを長期間に渡って診ることができない。著者の大原先生は東京大学から虎の門病院に移られたあと、同病院に30年近く勤務されてきた。したがって、一人の患者さんの経過をほとんどの医師が経験できないほど長期間観察して来られたわけである。さらに著者の施設には、その腕前を頼って東京都内はもちろんのこと、全国から数え切れないほどの患者さんがやってきたはずである。私も現在の病院に勤務する前は、26年間、ひとつの大学病院に勤務し続けたので、長期間の経過観察で教科書に書かれていないことを経験できることは知っていた。しかし、著者のように多くの症例を集められるはずもなく、多彩な症例を収載した本書の写真に目を奪われるばかりであった。

りであった。

この本には著者の貴重な長期観察経験から得られた一般の教科書には書かれていない母斑の意外な変化も多数収載されている。生下時あるいは若年で発症することの多い母斑の患者さんの経過観察は、人そのものの成長過程の記録でもあることが「母斑の経過」や「母斑の治療」の項からも見てとれる。

臨床写真、病理組織写真の構図や拡大率、鮮明さにも特筆すべきものがある。昨今の学術論文は写真スペースが小さくなりすぎて病理診断の真偽の程も確認できないようなものが多くなっているが、本書ではほとんどの写真が十分な大きさに掲載されているため、その特徴がとともわかりやすく、解説が簡潔かつ的確に説明してくれている。

本書は若い頃から本邦 No.1 の皮膚外科医を貫き通した著者が、自分の生きた証として（もちろん、まだ、ご活躍中であるが）、その経験のすべてを次世代に伝えるために仕上げた珠玉の一冊に間違いのない。本書を読み終えてメラニン色素をもつ病変の診療が得意になったと感じるのは私だけではないであろう。



B5判・480頁

定価 15,400 円（本体 14,000 円）

学研メディカル秀潤社・2020年9月発行